

第三章 学燈(鑑)の誕生

一 初号の体裁

明治三十年三月十五日に月刊雑誌「学の燈」(英語で The Light of Knowledge と副題してある)の第一号が出た。爾来、太平洋戦時中の少時期に政府から間断的中絶を命ぜられただけで、今日まで約七十年の長きにわたり存続している「学燈」のおこりで、外の誌界に向って書店のPR雑誌(これはもちろん終戦後進駐軍のはやらせた新語で、広告と宣伝をかねた広い意味につかえる都合のいい言葉だから、さかのぼらせて茲に使用する)として最古のものである誇りをもち、内においては今日、社史をさぐる唯一最上の資料の宝庫である。

丸善ではこれまで、時に応じて目録を出していた。Catalogue of Books (丸善商社洋書目録)の最も古いものとしては、明治十六年十月(一八八三年)発行のものが残っており、「丸善和書目録」は明治十二年九月(一八七九年)発行のものが発見せられている。しかし日清戦争の結果、支那に関する古今の書籍が大いに需要され、またこれに大勝した二大原因は、日本の憲政の施行と、普通教育の普及にあるといわれ、各地に公私立学校新設の急増をみて、教科書類の売捌がいちじるしく伸長した。そこで今までの年一回(あるいは何年かに一回であったかも知れぬ。現品がのこっておらぬので正確なことがわからぬ)の目録と、十数頁からなる「和洋書籍及文房具時価月報」



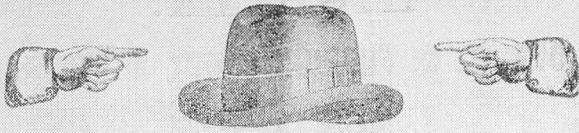
「学の燈」第一号

点検してゆけば、当時の丸善の業態がわかる。

まず広告の第一頁は英誌 *Engineer* の予約特注に応ずるといので、この当時世界的声価を有したロンドンの工業雑誌は、日本の急激な産業発達に瞠目し（歴史はくり返すで、ちょうど今エコノミスト、ロンドン・タイムスはじめ、多くのイギリス新聞雑誌のすることと同じである）、J・ランソムという記者を特派し、その第一報は最近号にあらわるべく、爾後続々と日本記事がのる予定だと英文で全一頁にわたり記述している。第二頁は *The Century Dictionary; An Encyclopaedia Lexicon of the English Language* の英文広告。

第三頁は矢津昌永の「日本地図」、第四頁は同じ著者の「中学日本地誌」。この頃は最も世間にきこえた地理学者で、日露戦争の後まで、この人の地理書はひろく全国にもちいられた。これは第九版で「改訂訂正を加え台湾新領地ハ勿論新設の郡等数百箇所を増訂し」とある。戦争の結果、それに伴う内政改革の郡の新併合が、教科書に現れ

（創刊推定明治十六年）では、顧客の要望に答え得ないので、この目録の摘録（単独の目録は引続き別に発行）と月報をあわせて一体とした形式の月刊雑誌を発行することになったものと思える。初号は「発刊之辞」「祝辞」「論説」四篇、「雑録」三篇、「詞苑（詩歌俳数十首）」「新刊紹介」「雑報」で二十八頁。定価は五銭である。広告は赤い色紙で巻首に八頁、巻末に八頁、それに裏表紙の表裏も広告につかつてある。この広告を仔細に



LATEST FASHION

品 目	
婦人用手暖 (マフ) 婦人用シヤツ 婦人用肩掛 膝掛 白、縞毛布 胴 ズボンツリ カラ、カフ 洋服下シヤツ 飾 卸 襟 飾 絹、毛靴下 手 袋 日 利 安 帽子 (黒色)	旅行用食器 旅行用化粧道具 旅行用水筒コップ 護謨枕護謨尻敷 西洋手紙、手拭入 白粉、水白粉 サボン、サボン入 西洋齒磨、齒磨入 箱、楊枝、楊枝入 双眼鏡、手鏡 ブラシ ナイフ、ハサミ、口拔 髮剃、皮砥 護謨湯タンボ 護謨水袋
其 他	バイブ 札入、簀入、弗入 寫眞ブック 呼 鈴 シヤクフ 毛土香、毛足暖 護謨合羽 風琴、手遊品 西洋蠟燭

東京日本橋區通三丁目六十番地

菱屋洋物店

てきたのだ。

それからの二頁はよその広告を取ったもので、次の二頁は西洋小間物店菱屋の広告で Dealer in Foreign Fancy Articles とある。これは明治十七年の創立、丸善の経営であること、既述のとおりである。その販売した全品目をみると、丸善がこのころ洋書以外、どのような謂わゆる唐物を販売していたか、一目瞭然なので、写真版をかかげた。

この菱屋の西洋小間物に対応するのが、丸善株式会社書店の「西洋文房具各種」で、巻末広告の第一頁を占め、「欧米諸国に於て著名なる専売店とは特約を結びてペン先、ペン軸、インキ、インキ入、カッビープレッス類、万年筆各種其他一切の文房具」を他店に率先して輸入し、廉価を旨として販売するとある。それ以外はみな他店の広告だが、ただひとつ珍しいのは熱海の温泉旅館富士屋の広告で、国府津着の京浜および神戸からの汽車の時刻表、それから小田原熱海間の馬車と人車鉄道の時刻表がのっている。「国府津ゆれば馬車ありて」という鉄道唱歌の一節が端なくも思出される。富士屋は今箱根の方が世界的に有名になっているが、当時は熱海にあったので、つまり丸善が広告に採用するのは、ホテルでも広い国際的視野をもつところに限られていたのだ。

記事には、とくに丸善の特色と結びつくような嶄新なものはないが、雑録に志賀重昂著の「山水叢書河及湖沢」の一節、大阪の繁栄は淀河にあり、東北で鉄道のついているのは最上川の一地域にかぎり、北海道も札幌に開府せられたのは石狩川があったお陰だと説いた有名な章が引用せられ、そして札幌農学校の広大な牧場の銅版写真がのって、この著者みずから「想ひ起す十数年前此園中に馬を駆りて耕種せしことを」の一節をもって説明としてい

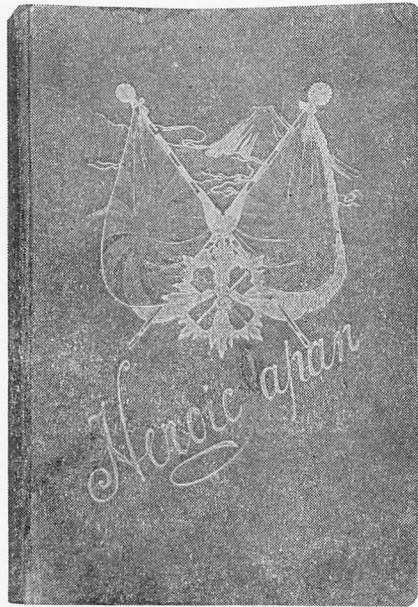
るのは、いかにも清新で、この雑誌の将来を予示するかの如く、また丸善の雰囲気固めつつあるかのようでもある。

雑報に、「小学校教員の俸給」と題して小学校本科正教員の平均月給は、第一位千葉県の一二円九〇六厘、第二位北海道の一二円五三三厘、第三位群馬県の一二円三六九厘で、東京府は一一円九三八厘、最低は島根県の七円四五五厘、石川県の七円四一七厘などである。これは恐らく、丸善で学校用書籍をあつかう事が多い結果、どこからこの記事を採択して来たのであろう。

一一「ヒロイック・ジャパン」

第二号の巻頭論文は「漢学の運命」で、中村敬宇がロンドンから帰った時、少童に初めから英語ばかり課したところ、目ざましく進歩が早かったが一定の段階にゆくと、停滞するに反し、初め漢学をおさめた学生はその難関にぶつかっても乗りこえてゆく。同じ洋行者でも漢学の素養をもったものと、それを欠ぐ者とは、霄壤の差異が生じてくるので、国字をローマ字に改めるという暴論をしたことを悔いたという談話をひき、この筆者は、英漢ともに修得するのがよいが、その暇なしとすれば、先ず漢学をおさめて英学に及ぼすのが斯道の捷徑ではないか。漢学は衰えたといっても、その運命は容易に卜知できないと、云わば、はなはだ「丸善」らしからぬことを結論としている。

本文には Heroic Japan にたいする海外の批評が Chicago Record (11 th, Dec., 1896) と Dial (16th, Dec.,



Eastlake & Yamada-Heroic Japan

1896)と二篇転載せられている。これは日本で英語教育に多年の功労ある博言博士の Eastlake と L. B. の学位の所有者の Y. Yamada という日本人との共著になる The Authentic History of the Japan-China War である。しかし日本の軍功が過大に海内に流布しすぎた点もあり、また旅順の惨虐といって火のないところに立上った煙もある。それらを宮廷から陸海軍筋にただして、正確な史実に沿って書いた英文日清戦争史で、横浜にあった Kelly and Walsh 社の出版だったのを、国内では丸善が一手販売を委託されていた。緒戦における成歟・牙山役に、咽喉に敵弾を受けながら、ほとばしる血潮をおさえて最後まで進軍喇叭を吹きやめなかった白神源次郎一等兵の壮烈な行爲は、軍楽隊が軍歌として国民一般の志気を高め、日本にきていた英詩人で釈迦伝をえがいた長詩 The Light of Asia の一世にきこえたイギリス詩人 Edwin Arnold は A Japanese Soldier という詩をつくった。その書き出しは第一章に述べた通りである。

又 Lafcadio Hearn は、当時はやった有名な軍歌「喇叭の響」を“Shirakami Genjio”と題して英訳して、彼の等身の著作中でも特に有名な「心」の“After the War”という章のなかにおさめている。

この両詩人によって、英米にも伝わった白神源次郎がその勇敢な喇叭卒というのは、じつは誤りで、木口小平であることを、この英文戦史は訂正し、シカゴ・レコードは慧眼にもそれを取上げて、

「たとえばアーノルド卿が有名な喇叭卒の材料とした事実の如きは実証できない。しかしそれに類した勇敢な行為があることは他にあったので、それが語られている」

と批評している。こういう記事を転載して、「学の燈」は東西文化交流の仲介者たる使命の鋒銑を早くもあらわしている。

三 万年筆のこと

広告には、「万年筆」が亀の絵とともにのっている。「鶴は千年、亀は万年」という諺の連想である。

さて明治における万年筆の由来をたずねると石井研堂の「明治事物起原」（昭和版による明治文化全集版一四二一頁）に

「万年筆、明治二十五年五月発行、丸善の『和洋書籍及文房具時価月報』に万年筆の広告あり。

Caw's Stylographic Pen

Caw's "Dashaway" Fountain Pen

内田魯庵曰く「前者は明治十七年頃より、後者は二十四年頃より輸入せるものなり。万年筆の名称は、丸善の店頭より出でしこと勿論なり。他に販売する店のなきはもとより、丸善にては十八年頃、すでに万年筆と唱

えいたりし云々」

これは魯庵の書いたものによつたのではなく、直^じき話^わを聞いてかいた記事と思える。手もとにある「丸善商社洋書目録」明治二十一年版にも、すでに「舶来万年筆」の広告は見えているのだから、この記憶にまちがいはないだらう。

万年筆が、今日これを所持せぬ者はない迄に普及したについては、魯庵のいう如く終始一貫して丸善の努力があった。日露戦争に凱旋したある將軍に新聞記者が談話をとりについて、その話に出てくる文字を教えてもらうため万年筆のキャップをとって、尾端にかぶせて、さし出すと

「なんと、このままでインキもつけないで書けるのかえ」

といつて、非常に不思議がつたという。(田中万逸著「死生の境」の中にある逸話)だから戦争中は森鷗外でさえ、この便利なものを陣中に携行していなかった。

明治文化の大先達の石井研堂も、初めてこれを求めたのが明治三十九年八月で、日露戦争終結の翌年である。文士ではさすがにハイカラの国木田独歩が愛用し、死するに及んで、その高価を投じて三越で買い求めた釣竿は、弟の国木田北斗が懇望するのを退け、「名器は名人に譲らざるべからず」といって石井研堂におくり、丸善で買ったであろう万年筆はこれ又人をえらんで誰かにゆづつたというのは、有名な話である。

夏目漱石のような英文学の専攻学者も、万年筆には縁が薄かつたようだ。それでも明治三十三年に洋行する時、親戚の者が一本くれたというから、そのころでもこれを贈答品にもちいるような者のいる親戚関係のなかに、漱石は

生活していたのである。しかし洋行の船中、機械体操のまね事をしていて折ってしまい、洋行中は只のペンで過した。しかし明治四十一、二年ごろと思えるが「丸善からペリカンと称するのを二本買って帰った」と自らかいているところが、むやみにインキが紙の上にぼたぼたとこぼれ落ちたり、さがが干からびて思うように出なかったりするので、漱石も使いながら相当に虐待し、「彼岸過迄」を書くころには、それを廃して又もとのペンにかえた。この前後のことと思うが、内田魯庵が一本、贈ったことがある。それについて魯庵はこう書いている。

「(夏目漱石さんは) 万年筆を絶えず愛用せられたが、インキは何時もセビヤのドロイング・インキだったから万年筆がよくいたんだ。私が一度、いい万年筆をえらんで、自分で使いならしてから、インキ瓶をつけてもたせてやったことがあるが、そのインキがブリュ・ブラックだったので気に入らなかったそうである。

『ブリュ・ブラックを使えば帳面をつけているような気がする』とよく言はれた」

そして漱石と万年筆の相性はあんまりよくないことを知りながら、魯庵は丸善のため万年筆の宣伝記事を、たのんだのである。それについては、魯庵は座談でもそのことを語ったが、また自分でこう書いている。

「夏目さんは他人にたのまれたことを、よく快諾する人だったと思う。随分いやなことでも快く承諾されたのは一再でない。ある時などは私は、万年筆のことを書いて下さいと頼んだ。若い元気のいい文士学者へでも、こんなことを頼もうものなら、それこそムキになって怒られようが、先生は別にいやな顔などせられなかった。ただ『僕は困る』と言はれた。と、私は『いえ、悪くさへ云はねばよいから……調宝なものだ位に書いて下さい』とたのんだ。そんな風で云はばこちらで書き上げた物に署名して貰うぐらいにしても快諾されたことがある」



万年筆文集（明治45年6月刊）
（表紙魯庵筆）

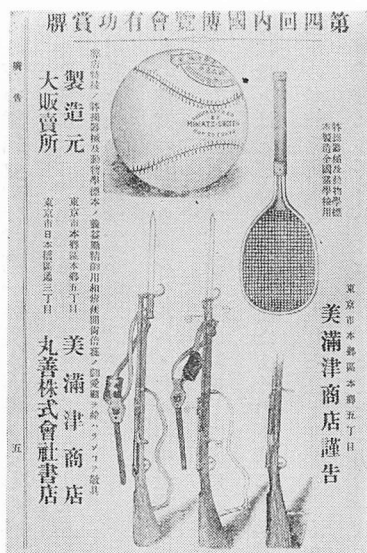
こうして出来たのが「余と万年筆」という一文である。

「このあいだ魯庵君に会った時、丸善の店で一日に万年筆が何本位売れるだろうと尋ねたら、魯庵君は多い時は百本ぐらい出るだろうと答へた。それでは一本の万年筆どの位長く使えるだろうと聞いたら、このあいだ横浜のものが、ペンはまだ可なりだが、軸がへったから、軸だけ易へてくれと云つて来たのがあるが、この人は十三年前に一本買ったきりで、その一本を今日まで絶えず使用しているのだといふから、これがまあ一番長い例らしいと話した」

この文章の発表時は明治四十五年六月とある。その翌七月には、明治天皇の崩御をみたのだ。してみると、明治十七、八年から輸入して、丸善がおそらく他のどの商品よりも、宣伝流布につとめた万年筆は、約三十年後には、一日に百本売れるところまで漕ぎつけている。このころ博文館の編集にいた長谷川天溪は「万年筆」という標題の文芸感想集を出しているから、これを使用していたこと間ちがいなく、同じ編集の前田晃は「文章世界」に「泉筆だより」というのを連載したが、これは遂に一般用語とならず、一年もせず廃語となった。

四 銃剣の製作販売

また元の目録の説明にかえると、万年筆の広告から一枚へだてて、運動具店の美満津商店の広告があり、べ



小学校用木銃広告

ス・ボールとラケットの絵の載っているのはいいとして、その下に付け剣をした歩兵銃三挺の絵がならんでいるのに、注目せざるを得ない。しかも製造元は美満津だが、大売捌所は丸善株式会社書店となっているので、自社でそんなものまで売られたことがあるとは夢にも知らぬ今の丸善社員は、

「へえ、うちで鉄砲まで売っていたのかなあ」とびっくり声を発する。この時は大販売所になっているだけだが、明治二十三年の丸善書店洋書目録をみると、同じく銃剣の絵入り広告があって、それにははっきりと「丸善工作部製」とあり、すなわち丸善で銃剣まで作製した時期があり、のちにこの仕事を美満津にゆずって、自分は販売所になったものと思われる。

但し、これは「小学兵式体操用木銃」で兵士のもつ本当の武器ではない。昭和になっては軍事教練という言葉がもちいられるようになったが、明治時代これを小学児童に課するのは、「兵式体操」と称して「体操」の一部になっていたから、つまり学用品として製造したのだ。

小学校に兵式体操を課するようになった由来は、村田銃の発明者の村田経芳がヨーロッパを一巡してスイスにいてみると、あそこでは射撃が盛んで、日曜日になると男なら老若から少年にいたるまで、銃をかついで射的場において、競点射撃をする。そして一等をとった者に、

その夜の舞踏会では、第一の美人が手をさしのべてダンスをするのを、榮譽とも喜びともしている。

小学校には、どこでも現役下士が教官として配属され、熱心に訓練している。児童も軍隊と同じく背嚢に読本や学用品を入れて通学するのだ。

あの林檎の的のウィルヘルム・テルの中世時代は、ヨーロッパ随一の強兵国だったスイスは、近世にいたると、永久中立を宣言して、平和国に転換したのに、なお国をこぞって小学時代から兵事的訓練を怠らないのに、村田経芳はほとほと感心した。たまたまその下宿に小学児童がいたので、村田は新しい学用背嚢を買って、乞うて、その児童の名前を記入して使い古した品と交換し、もち帰って日本の小学教育もそうすべきであることを説いてまわったが、誰れも耳をかたむけぬ。たまたま明治十八年、太政官が廃せられて新たに内閣制度ができ、村田とは同郷薩摩の森有礼が最初の文部大臣に就任したので、村田はその古背嚢をもって駆けつけて、つぶさにスイスの制度を説いて、日本の新教育にもこれを採用することを力説勧告した。

「吾輩も」と森はその熱心に動かされ、「スイスの教育制度については、若干しらべてみたこともある。しかしそこまでは知らなかった。よし実施しよう」といって、云うところの兵式体操が小学校のカリキュラムに加わることになったのである。

当時は尋常小学校四年で、これが義務教育、その上に別立して四年制の高等小学校があった。と云って明治二十年年代初頭は、義務教育だけは、どうやら受けても、高等小学校の入学者が至って少く、一村一校では経済的にも成立しないので、一郡で郡役所の所在地に一校だけ建っているのが通例で、遠くはなれた村から入学する者は、親戚

知己の家に寄宿してかよった。

兵式体操はその三年と四年に課したので、高等小学校にでも通うものは、経済的余裕があるともみて、この木銃はみな学童各個に買わせたのである。そのころは教科書でも上級生が使い古したのを下級生にゆずり、又は貸与したもののだが、この木銃もそうで、新入生の数のふえた分だけ、新購入して補充したのである。

だいたい兵式体操では、操銃の初歩から小隊教練、中隊教練までを教えた。日清戦争を中心に、明治二十年代から三十年代の半ばまでが最も盛んで、しだいに各町村内に新高等小学校が分立する数が多くなり、それらの新校には文部省の方針から兵式体操を課さぬものが多くなり、日露戦争の結果、初等教育がいよいよ重視されて、旧制は廃止され、尋六、高二の組織となり、この新しい二年制度ならどんな貧しい村でも経営ができぬことはないのです。高等小学校が各町村立になるとともに、兵式体操はまったく廃止された。美満津や丸善で、その用具の製作販売を停止したのは、その数年前からであろう。

なおこの小学兵式体操用木銃は、兵銃とちがって軽いこともちろんで、発砲はできず、当時「紙管」といった火薬の玉を、引金をひいて撃鉄が打つと、爆発して音とわずかな煙だけ発する仕かけになっていた。中学、高等学校、専門学校が軍隊の魔銃をゆずりうけて、発火演習でもできたのとは違っている。小学生の肩は、ほんとうの銃の負担力はないから、模擬木銃をかついだのだ。——これが丸善で「兵器」を製造し、販売した真相である。

五 ケニベル博士の哲学講義

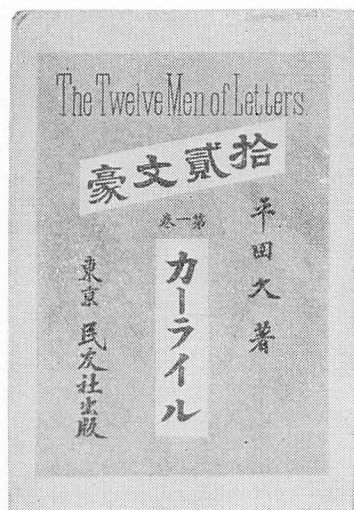
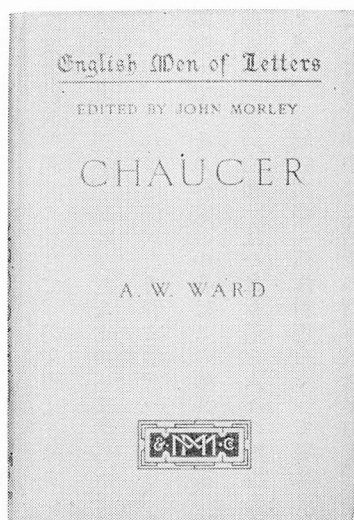
「学の燈」は発行後おそらく所期の反響を得たのであろう。第三号には

「弊社は迄書籍時価月報を発行致来候処今後は弊社発行雜誌学の燈紙上へ掲載広告候事に相定め毎月学の燈御送付可申上候に付不相交御愛顧御注文被成下候様奉願候也」

という「稟告」がかかげられている。これで月報は廃刊になったものの如くである。広告で目につくのは、文学士塩井雨江、同大町桂月、同武島羽衣の三人合著、大日本図書株式会社発行の「国文学大綱」で、全十二巻のうち第一巻大町桂月著の「契冲阿闍梨」が再版、第二巻塩井雨江著「賀茂真淵」と、武島羽衣著「香川景樹」が五月と六月の近刊となっている。

いわば洋書を主とする「学の燈」に国文学叢書の広告をみることに、面妖ともいえるが、これには理由がある。大町桂月著の序文「国文学大綱に題す」をみると

「西洋には普通文学史の外に、おもに思想の潮流を説きたる比較文学史あり、また一の大詞人を詳説したる名人伝も頗る多し。殊にモーレーの出版に係れる英国文人叢伝は、毎冊一人を限りて、三十七八の英国古今の文豪を説き、ロバートソンの出版にかゝれる文豪列伝には、英米大家の外更に四五人の独仏の大家を加へ、これも毎冊一人を限りて詳述せり。余等これらの書に接する毎に、我国にもかかる叢伝あらんことを希望して止まず」



English Men of Letters と十二文豪

という一節がある。この English Men of Letters は Macmillan 社の出版、The Great Writers は W. Scott 社の出版だが、とくに前者は逸早く民友社の目をとどめる所となつて「十二文豪」(The Twelve Men of Letters と表紙に英語で印刷してある)となつたこと「丸善外史」に詳説したところだ。これは和洋の文豪混淆で、近松や、新井白石、荻生徂徠もあれば、ゲエテ、ウォルズウオルス、マコーレイもある。この叢書はイギリス両文人伝から得た暗示を国文学者にしぼつたので、本来なら「学の燈」は舞台ちがいがだが、「英国モレー氏出版の英国文人伝叢書あり……」を広告文の冒頭においてあるのをみると、全くまるまる無縁ではない。帝国大学の文学科は久しくふるわず、無用の長物のように考えられていたが、俄然、日清戦争の戦勝を境として、哲学からは高山樗牛、姉崎正治、桑木嚴翼、国文からは塩井雨江、武島羽衣、大町桂月、英文からは彼等より少し先輩として夏目漱石、後輩として上田敏などが輩出して大学の価値を上げ

たと言われた時だ。時あだかも落合直文の提唱した新国文学系の三秀才として塩井、武島、大町は大学を巣立ち、国文学勃興の潮流に乗じて、美文韻文と称する一種幽麗の擬古文体を創始したのが、文壇を風靡した。明治文学史家は、北村透谷、島崎藤村などの「文学界」だけが、日清戦争前後にまたがる青春の文学のように考えている者が多いが、それは西洋式な青春文学だったので、その光芒のようなく薄れたのに代って現れたのは、いわゆる「美文韻文」で、その作家の中心はこの雨江、羽衣、桂月ら三人の新国文科出文学士であり、その合著の「花紅葉」桂月個人の「黄菊白菊」はやはり若き人々の感傷をさそうに十分な青春の文学であった。只「文学界」の西洋式ではバタ臭く、尾崎紅葉が「西洋料理をくって嘔吐をはいたようだ」と冷嘲したのが、いささか当たっているのにたいし、これは国文学中心に若干の新時代味を加え、全国の中学生をひろく陶醉させたことは、むしろこの方が「文学界」にまさる青春文学であった。その花形青年文学士たちが日本文学史上に高く聳立する名家を、やや系統的に網羅して、評伝するというのだから、大いに世の注目をひいた。第一巻「契沖阿闍梨」にたいしては「学の燈」は好意ある批評をのせ、他の「太陽」や「帝国文学」「早稻田文学」「文学界」「史学雑誌」「国学院雑誌」などの批評と共に、第二巻塩井雨江著「賀茂真淵」の巻末に採択して掲げられている。

「学の燈」の「新刊批評」で、いまひとつ注目したいのは第六号の「哲学要領」にたいするものである。僅々五行で、特別に大したことを云っているのではないが、その批評に取上げる数がきわめて少く、本号でも十冊をこえぬが、その中にこの著を洩らさなかった炯眼に敬意を表する。というのはこれは「文科大学教師フォン・コニーベルグ講、文学士下田次郎訳」とあり、すなわち講者は、帝国大学教授として日本哲学の脊椎骨をつくったといわれる

Dr. Raphael von Koeber である。

ケェベル博士が日本に來朝したのは、明治二十六年で、最初に始めた講義は「哲学入門」といい、哲学概論と哲学史によって構成せられている。學生がドイツ語に習熟していないので、これらの講義は英語を用いたのであった。その「哲学概論」の方だけを訳したのがこれである。

「紳士諸君、余がこの講義に諸君の臨まるるは、余の欲び迎ふる所なり。余が哲学の教師として諸君に見ゆるは、余の快とし、且つ誉れとする所なり。余は速かに諸君と相語り相解するに到らんと望みを懷く。余は余の親しき國語（ドイツ語）を以て諸君に話すを許されざるを悲しむ。余は余の不完全なる英語を寛容せられん事を諸君に望む。余はこれを一層善く學ばんことを期し且つ諸君に約す。されど諸君も独逸語に關して同じ事を余に約して可なるべし。蓋し哲学に興味を有し、或は哲学を專攻する人に向つては、何人にも、近世即ち現に活用する國語中独逸語の如く要用なるものあらざればなり」

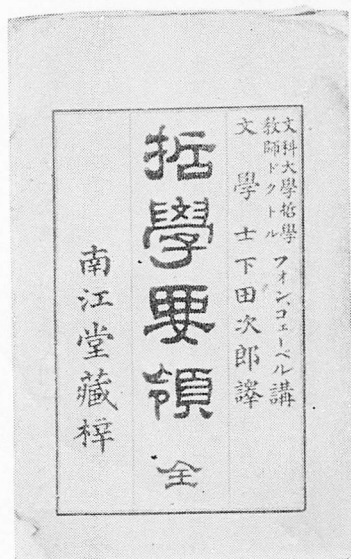
というのが開講の辞であり、なんとなくその風采が偲ばれるような氣がする。この概論は「其原稿に就て翻譯せるものなり」とあり、元の英語講義は印刷本があるか、どうかを知らぬ。

しかし難解を訴える學生が多かったと見え、「哲学史」の方は十六頁ずつ印刷に付して配布した。（『丸善外史』補遺の長谷川天溪の談話参照）したがって「哲学史」の方は、上巻二冊に製本したものを、古書展などで時々見受ける。

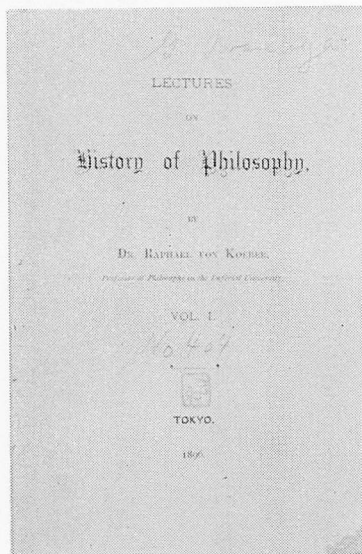
Lectures on History of Philosophy とする書名は Tokyo, 1896 (For private circulation) である Vol. I は Introduction, Synopsis of History of Philosophy を前置きとして Greek Philosophy から The



ケニベル博士



哲学要領



Lectures on History of Philosophy

Mediaeval Philosophy を終い、The Philosophy of Transition を終いする (三一〇頁)° Vol. II は The Modern Philosophy René Descartes から始まり、後半は Modern Philosophy Since Kant となつて Schopenhauer で終つてゐる (四一九頁)°。ほかにケッペルには Lecture on Aesthetics and History of Art. 1898 一冊があり、同じく private circulation として学生に配付したものである。

しかるにケッペル博士の年表や著作表が、この日本に赴任して刊行した最初の和英両著について、何等言及するところのないのは、いかにその流布が少なかったかを示し、この「学の燈」でも取上げて批評してくれていなかったら、後世のわれわれはそれをさがす手がかりをつかみ得なかつたであらう。

六 輸入目こぼしの忠臣蔵

第四号の白紙広告頁に Ninth Edition Encyclopaedia Britannica と Webster's International Dictionary の絵入り広告が見ひらき頁でのっているが、まだ予約募集の花々しさは展開していない。第八号の洋書広告のなかに、英訳「忠臣蔵」ののっているのが、一頁の三分の二を占めて大きく扱われているのを見ても、重大である。

Chushingura or The Loyal League; A Japanese Romance. Translated by Frederick V. Dickins, Sc. B., Illustrated by Numerous Engravings on Wood, Drawn and Executed by Japanese Artists, and Printed on Japanese Paper (Third Edition, Revised-1.00)

この書の初版は明治八年に横浜で出版されたのだが、この三版がイギリス本国で出版せられ、非常に流布し遂に

Sixpenny Library 版となり、おそらくそれが日本には非常に沢山入ったのだ。広島県忠海中学の五年で教科書も

しくは副読本としてもちいたと見え、五年生某の鉛筆の書き入れのいっばいにある本を東京の古書店頭で入手したこともある。忠海のような、いわば僻陬の中学で使用されたぐらいだから、都会の中学では各所でもっと多く用いられていたという推察もつく。後には扉に初めから Maruya の名を印刷してある版が入りこんでいる位だから、おびただしい分量の輸入をみたものだと思える。

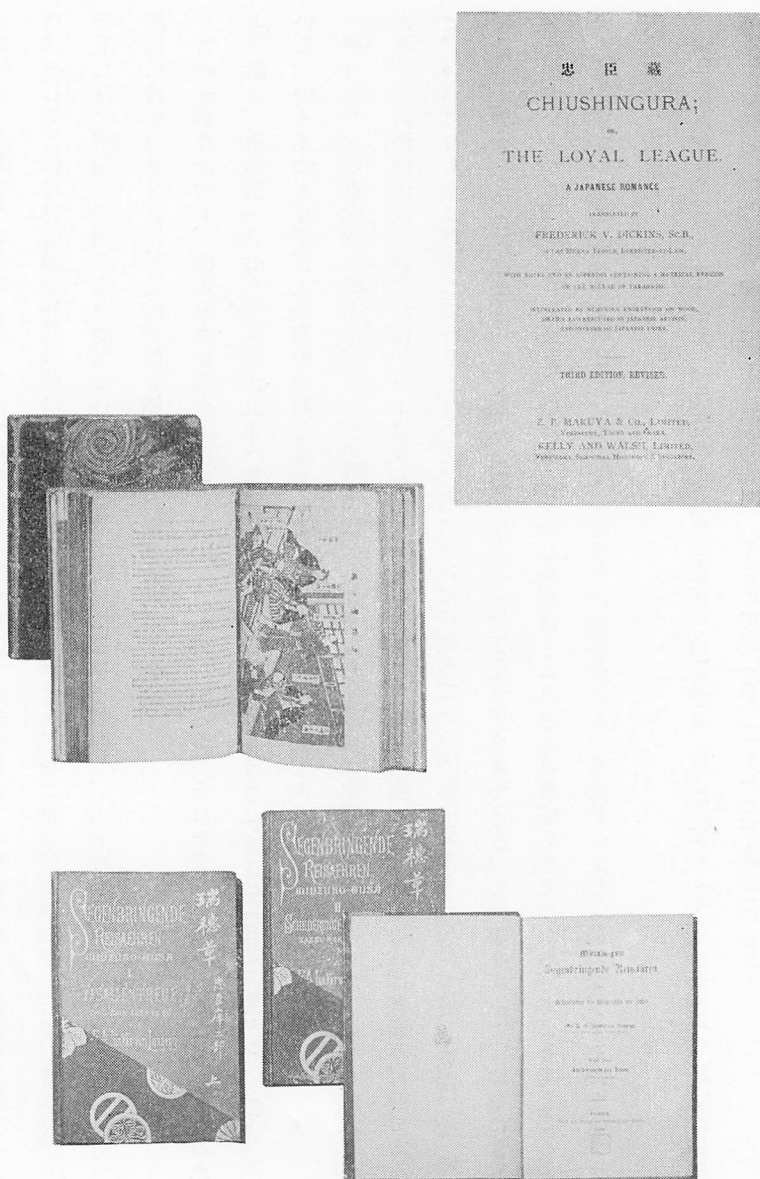
この訳者を小説家の Dickens と早のみこみして紹介した英学者が、もとあったが、そうではなく明治に早く日本に来住したイギリスの弁護士である。日本語が達者で、日本文学の造詣は拔群であった。明治五年にペリユの汽船マリヤ・ルス号という奴隸（支那苦力）の運搬船が暴風雨を避けて横浜港に入った時、日本がイギリス公使ワトソンの入れ知恵と尻おしで、その奴隸を解放すると、ペリユは訴訟をおこして横浜で領事裁判がおこされた。その時日本側はアメリカ人弁護士ジョン・ヒール（ホールとするが正しい）に依頼すると、ペリユはイギリス人弁護士フレデリック・V・ディキンズを立てて対抗した。その弁論をみて、後年尾佐竹猛博士が双美双絶、あんな早いころ、よくあれだけエライ弁護士が日本にきていたものだと、感心している。そのディキンズが、第一日本は、奴隸解放などする資格の頭から無い未開国である。その証拠には国内に、人身売買（すなわち奴隸制度）が現存するではないかと云って、芸娼妓の契約証文から花柳病院のカルテまで持ち出したのには、虚をつかれて日本側で大いに狼狽し、裁判を中止して、泥縄式処置に、芸娼妓の解放令を發布した。僅々十年ほどのうちに、ロシアの農奴解放、アメリカの黒人奴隸解放について日本のこの芸娼妓解放が断行され、十九世紀中葉の世界三大解放運動といって併

称される。逆縁ではあるが、ディキンズの弁論と証拠提出が、日本をしてこの解放に踏みきらざるを得なくしたのだ。そしてこれは更に国際仲裁裁判に発展し、ロシアのアレクサンドル二世皇帝が裁判長として、日本勝訴の判決を下した。開国して間のない幼稚な日本が、世界的に黒白を争う舞台で、大きな白星ひとつ逸早く獲得できたのも、間接にはディキンズに社会的病弊を摘発された怪我の功名である。

この一事だけでも、彼の日本研究がどんなに深かったかがわかるが、それを文学上に現わしたのが、この忠臣蔵の英訳と、その翌一八七六年（明治九年）Hyaku Nin Ishin (Japanese Lyrical Odes) をロンドンで出版している。いうまでもなく百人一首を完訳したものととしては、これが最初であろう。

ディキンズの忠臣蔵の原本は、元より史話に依ったのではなく、竹田出雲の「仮名手本忠臣蔵」を翻譯したのである。あの浄瑠璃入りの言わばミュージカル・ドラマを正確に西欧語に訳することとなれば到底不可能であろうのに、いかに日本語に熟達しているとはいえ、ディキンズが敢えてその困難な道をえらんだのは、正話はすでにMifordが *Tales of Old Japan* の巻頭の "The Story of Forty-Seven Ronin" の美事な説話で、すでに世界的評判を得ているから、それを避けたのである。しかし当然にところどころ省略を加えながら、およそ考え得る最高の成果をあげているのは、さすがにディキンズの仕事だけの事がある。果然その反響は甚大で、すぐに左のフランス訳とドイツ訳があらわれた。

Tchou-Chin-Goura ou une Vengeance Japonaise. Traduit en anglais avec notes et appendice par Frederick V. Dickins. Tr. Française de A. Dousdebès, 1886 (Paul Ollendorff, Paris)



ディキンズ訳「忠臣蔵」第三版丸善版及仏訳、独訳

Vasallentreue. Chiu-Shin-Gura No-Bu. (Nationalroman und Schilderungen aus Japan von F. A. Junker von Langegg, 1880 (Druck und Verlag von Breitkopf und Härtel)

この独訳「忠臣蔵」は「瑞穂草」と題する三冊ものの日本文学翻訳からなり、その第一冊が大体ディキンズ英訳を踏襲して独訳したのである。

読者に如何なる反響をあたえたかは、十九世紀小説壇の鬼才 Robert Louis Stevenson がこう言っている。

「私の前に二冊の日本ロマンス絵入本がある。一つはディキンズ氏が英訳した Choushingura, or the Loyal League で、いま一つはグリイと斎藤修一郎のアメリカ版からゴウスロン氏の仏訳した Les Fideles Ronins である。どちらもミットフォードがあつめた珠玉の物語『四十七浪人』を文学化したものである。一度この物語をよんだほどの者は、おそらく藩士の忠誠を描いたこの戯曲を忘れることができないであろう。」(Two Japanese Romances)

彼はこの作をヴィクトル・ユーゴーの「九十三年」に比し、さらにもしアレクサンドル・デュマがこの題材を入手したら、いささか子供っぽくして一層千変万化の趣向に変え、また悪魔性も加えて、高度の騎士道的物語を作成したのであらうと云っているのである。

その独訳についてはベルリン大学の文学史教授の Wilhelm Scherer が「当代ドイツ第一流の作家でもこれに匹敵する作を出し得る者はない」と語っており、また巖谷小波の在独時代の知人で、批評家、劇作家として日本にもよく聞えていた Ernest Wildenbruch はディキンズの方をよんで「心理描写においてシェークスピアに

劣らぬ作だ」と歎賞したと、藤代素人博士が語っている。

ところで忠臣蔵が海外にひろく伝わったのには三つの系統があり、第一はミットフォードの「四十七浪人物語」で、第二はディキンズ訳の「仮名手本忠臣蔵」であるが、第三はステイヴンソンの文にも見えるグリイと斎藤修一郎が共訳した「忠義浪人」である。

The Loyal Ronins; An Historical Romance. Translated from the Japanese of Tamenaga Shunsui by Shuichiro Saito and Edward Greey (G. P. Putnam's Sons, New York, 1880) で、この本は丸善は元よりどのルートからも日本に入ってきた形跡がなく、知る人は絶無といってよい。日本国内においては今のところ愛書家として著名なドン・ブラウン氏と木村毅の手許にあるのが分っているだけで、他に所有者あるをきかぬ珍籍である。しかしヨーロッパ訳は、パリ大学の B. H. Gausseron によってフランス訳が出版され、condensation はドイツ、イタリア、スエーデン諸国で出ている。しかも日露戦争でアメリカ大統領シオドア・ルーズベルトが日本に非常の好意をもつ講和斡旋をしたのは、ルーズベルトが二十二、三才の若いころこの訳本を読んで、日本人が任侠義に勇む特殊の国民性なのを知り、それから日本に多大の関心をよせ、新渡戸博士の「武士道」をよんでいよいよ感心し、柔道なる独特のアスレチックのあるを知って、たまたま山下義韻八段の在米せるを知り、彼を迎え、家に道場をつくり柔道までまなんでいたのだ。云わば日露戦争に講和締結の有終の美あらしめたのはルーズベルトの努力で、そのため彼はアメリカ人として最初のノーベル（平和）賞を受けたが、その原因は一卷の渺たる「忠義浪人」の英訳にあると極言してもあやまりではない。しからずという者は、こころみに手っ取り早いところで信夫淳平博士の

「二大外交の真相」という研究書をひもといて見るとよい。もと外交官で、のちに外交史の学者となり、小村外交をとくに専門とした博士は、次のように云っている。

「そもそもルーズベルトは、如何なる事情からして、しかく熱烈なる親日的人物となったのであるか。これについては一挿話がある。講和使節として渡米したる小村寿太郎はある時ルーズベルトをその別墅に訪える折、談笑の間に『閣下は何の動機から斯くまでの好意（講和のため）日本の外務省の小役人になったほど日本のために計ってやった』とルーズベルトが属僚に語ったほど至れり尽せりの手筈がととのっていたのに小村全權が驚歎し感激したのである）を我国に傾倒せらるるに至りしや』と率直に尋ねた。すると彼は小村に『こちらへ来て見給え』と云いつつ書齋に導き、書架より一小冊子を取り出してこれを小村に示した。みると英訳の忠臣蔵である。斎藤修一郎と記せる『四十七浪人』である。斎藤は往昔ボストンに留学せる当時、ある種の軍用金補充のため忠臣蔵を意訳して紐育の一書肆に売付けたその刊本である。ルーズベルトは壮時これを一読し、日本人の忠に厚く、義に勇む特性を解し、爾来大いに日本人びいきになったのである。これルーズベルトが小村に親しく語った所で、ルーズベルト自身の性格からみても、さこそと思わる面白い話である。之とともに彼は日本の武士道に関する書を読み、日本柔道をも自ら試みなどするに及んで、ますます日本人に親しむの情に於て厚きを加えたのである」（『二大外交の真相』の『日露戦役の外交的考察』の第二章第二項『日本海の激戦大勢を決し米国大統領講和を斡旋す』の『彼の親目的由来』参照。三五二頁）

しかも信夫博士も恐らくは、この現物を見たことがないので、原本には表紙に「忠義浪人」と日本字も入れてあ

るのを、「四十七浪人」と誤記しているのによってもそれが幾らか証明され、その記述がまたこの書物のことにたいては何となく淡々しく弱々しい。

ディキンズの「忠臣蔵」の英訳のように、丸善を通して輸入され、しまいにはその書の扉に丸善の名前まで刷りこんで国内にあまねく流布した書物もあれば、斎藤・グレイ共訳の「忠義浪人」のように、ヨーロッパ数か国訳があり、日露戦争講和斡旋の原動力となったような歴史的役割を果たした本も、丸善の輸入書物から洩れると、何人もこれを知らない。

云いかえれば、丸善の手を通して入ると、入らぬとで、日本文化への影響に大きな差異があり、今更のように、あるいはこの百年、当然日本に入って、よき或いは必要な影響を与えていなくてはならない書物が、丸善の目こぼしになって、日本文化に欠陥のできているような事はないであろうか。それを思うと慄然たる感じがおこる。しかし大体において、丸善は万遍なく、あるいはバランスを取って、文化に偏向せず、科学や産業に片よらず、資本主義一遍倒でもなく、左翼への傾斜も少なく、その使命を果たしてきたと自負してもよいと思えるので、以上とくに丸善が目こぼしにした本についても一瞥を与えたのである。

七 最初の露和辞典

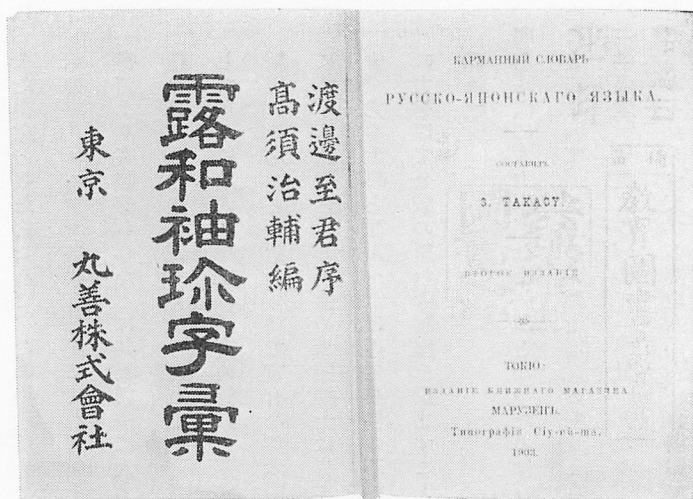
そうはいうものの「学の燈」は社内で文章のへたの横好きが寄りあって原稿をかく同人雑誌のようなもので、名家の寄稿などは少なく、巻末を占める洋書の広告が主として読む人に役立ったものであろう。第七号の巻頭にのせ

た「人力車の改造」という論文ばかりは、外字新聞の神戸クロニクルが取上げて批評したのは、編集同人が意外とし、また得意としたところで、この年最終巻の第十号にはその訳文をのせている。

「神戸クロニクルは我が社説に対し評言を加えて曰く、東京に於て近頃出版せられたる学の燈なる雑誌を丸善書店より寄贈せられたるに其社説中に人力車夫と公衆の間に起る衝突を拒かんとその目的を以て人力車に一の改造を為さんとの論説を見受けたる該記者は各人力車に対し廻転測度器を附するの便利ならんことを弁し且斯くしたらんには人力車夫の過度の賃金を要求せんことを拒くに至るへしと。記者又論して曰く鉄道事業の時間を精確にせんことを望む、嘗て富有なる米国の紳士が特別列車を仕立られんことを願ひたるに当事者の此要求に応ずる能はざりしか為め米国紳士は日本鉄道規則を大に擯斥したりといふ。然れども此はさして大事にあらず。尤も大事と謂ふべきは通信事務の不振の為め鉄道制度の進歩を妨けらるることなり。学の燈か若し其操觚の力を以て余輩の望む兩制度を励ますことを得たらんには名実相協ふを得て学燈の光輝益々燦爛たるに至らん云々」

明治時代に人力車が社会問題となったのは、今日自動車が、乗車拒否その他の横暴と、傍若無人の殺人器と化したことによって、世上の非難と憎悪の対象となつてゐる先蹤をなすものといふべきである。

「学の燈」は後につづめて「学燈」となり、さらに今日は變つて「学鐙」とかわつてゐるが、その百年記念号誌上で、あるロシア文学の専攻家から、丸善はロシア語ないしロシア文学にたいしては、ほとんど無関係だったと云つてゐるのは、恐らく古いことを知らないからで、ほとんど毎号ロシア語の書物が全一頁広告せられてゐるのは、



高須治輔編「露和袖珍字彙」

他の独仏語に劣るものでなく、スペイン語やイタリア語にまさる。主として語学や文法書なのは、このころ他の英独仏語の書も、語学文法書が多く、文学書の輸入はきわめて少ないという時勢だったのだ。まだ日本の海外文化消化力がそういう段階であった。丸善では高須治輔の「露和袖珍字彙」まで発行している。高須は明治十七年プーシユキンの「大尉の娘」を「花心蝶思録」と題して翻譯して、ロシア文学紹介の先登第一人者となり、二葉亭よりかはるかに先輩で、この著述は日本最初の本格的露日辞典の名譽をにのうといわれる。二葉亭の外国語学校長時代の愛弟子で、ハルビン学院長の清水三三教授は、その学生時代、これしか露和辞典がなく、「しかもこういう風の吹きまわしか、楓というロシア語に、蛙の舉丸という訳がつけてあるので有名でした。」と呵々大笑して語ったことがある。

明治三十年史の補遺として、中村重久の日記から若干の事

実を抄出しておこう。

二月二十八日 本日東京洋酒商組合へ除名願ヲ提出ス

三月十五日 午後七時ヨリ工作部楼上ニ於テ茶話会ヲ開ク

五月十五日 夜来茶話会ヲ開ク。晚餐ハ今少シ遅クスヘク井戸瀬電話室変更ハ至急ヲ望ム。又電話取次人ハ明日ヨリ書店唐物店ニテ隔日取次グコトニシ十一時散会セリ

六月十五日 午後七時ヨリ工作部楼上ニ於テ茶話会ヲ開ク東京大阪ノ取引ハ一層親密ニシテ互ニ事情ヲ通シ本店同様ノ価格ヲ以テ仲間取引ノ出来ル様ニシ又本店ニ於テ以後出来得ル限り独乙書輸入ノ利益ナルコトヲ協議シ九時三十分散会

七月廿四日 本日休業棚卸ヲナス唐物店ニ於テ三百三十五円余菱屋ニ於テ九十円余工作部ニ於テ三百八十五円余又書店ニ於テハ三千円余商品過上セリ

本タ茶話会ニ於テ貯金ノ為無尽ヲ執行スルヲ可トスト学鑑改良意見ヲ述ヘタル処何レモ多少ノ賛成ヲ得タリ
十月十一日 本社従来ランプ使用シタル工作部台所等本日ヨリ電燈ヲ使用スルコトニセリ

右記事に、多少の考察を加えると、なぜ洋酒商組合を脱会したのか、わからない。なぜならば丸善は今日でも店内に洋酒を販売しているのである。電話室の変更は、思うに、この文明の利器が意外の功用を発揮したからに
よるであろうが、しかしまだ唐物店及菱屋と共同使用であったものと見え、それで隔日に取次ぎを出すことになったのであろう。ドイツ書輸入の利益がこのごろになって、目について来たのは、官立大学が明治十九年ドイツ制に

ならって組織を一変し、ドイツ語尊重の気風をつくって、ベルツ、ケエベル、リースその他の名教授の相つぐ赴任の結果が、十年をへてようやく丸善店頭に現われてきたのだ。無尽は丸善が早くから店員福祉を考えた上での開設である。ランプの使用が電燈にかわるのは、十九世紀から二十世紀への移行が、数年内に迫っているのを象徴して興味が深い。

翌年二月二十日の「中村日記」に左の記事がある。

「本日本部に三十年商況ヲ差出ス。大略左ノ如シ

当季ノ商況ハ金融統テ逼迫ヲ告ケ本年亦水害虫害等天災アリテ自然活気ナク殊ニ七月金貨制度トナリテヨリ物価下落ヲ気構ヘ必用物ヲ除ク外一寸仕入ヲ見送ルモノモアリシ姿ナリシヨリ遂ニ不景氣ノ声ヲ聞クニ至リシカ
實際ニ於テハ格別影響ヲ蒙ムルコトモナカリシヲ以テ寧ロ沈静ナリシト云ハンカ

販売高ハ前季ニ比シ稍増加セシモ書籍ハ殆ンド一割余ヲ減少セシカ利益ニ於テハ幸ニシテ前季ニ劣ラサルヲ得
タリ」

まづは好調万々才で、明治三十年を終わったのである。